

収録・解説 酒井董美

語り手 浦上金一さん

(昭和3年生まれ)

収録・平成8年11月16日

日

あらすじ

昔、戸上に藤内狐という悪い狐がおって、あたりの百姓やなんかをとてもしめるので、「退治しちやらないけん」と話しておった。ある若者が「わしがそれをやる。馬一頭と綱を用意し、罌戸裏で火箸をかんかんに焼いておいてくれ」と言っつので、さうしてやった。若者は戸上の藤内さんが出て来そうなところへ行き、わざと「ばばーん、迎えに来たっでえ」と大声で呼んでみたが返事がなかった。先の方まで行って大きな声をして

藤内狐

(米子市観音寺)



イラスト・福本隆男

「尻焼き川」という名前は

声かして、おばあさんがつけ、「さあ、いなっじ向こうの方から歩いて来え」とトコト戻っていられた。若者が「えらたら、狐がだいぶん苦し遅しえけん、迎えにきくなたらしくて騒ぎだたが。この馬に乗っていいした。「この紐を緩めてごしえ」と言っけれど「落ちいけん。そのまま、そのまんま」と連れてもどつていたら、狐も気が引張って行った。「迎若者は持ってきた紐でえに来てごいただか」とばあさんの体を馬に縛りついた。

狐は「もういらえてごをひつつけてやった。しえ、もうちょっとう緩めてごしえ」と言っつて狐が死んだらいけんけいたけれども、しまいにん、まあこのぐらいで、なったら「しよんべがし放いちゃらや」と放してたんだった」と言っつ。馬やった。

その上でしよんべきやええけん」ともどつていたて、一目散に山の方へ逃けれど、「しっことうんげた。帰りがけにちよっこと一緒に出だいたけとでも楽になろうかと、ん、降ろいてごしえ」と川に尻をつけた。そうし今度は狐の方から泣いてたおかげで狐も焼かれた頼みだした。「この狐め。ところが治ったが、焼け今日はちえていんでえ尻を川につけたといつ(連れて帰つて)、えらことから、今でも「尻焼き目にこかしちゃあけき川」という名前がついん」と若者も言いだした。た。その昔、こんぼち。そして若い者の寄つている会場に戻った。

解説

「さーあ、焼け火箸を用意してああか」と言っつて、狐の化けたばあさんある藤内稻荷として祭らを馬から引きずりおろして、その焼け火箸をだれとして藤内狐の登場するもかれもで、狐のタンペ話はこの他にもいろいろ(尻)にべーたべーたひある。この話はそのようにつけて、「こらえてごなもの一つである。しえー」と言っつやつを無(元鳥取短期大学教授)理やりタンペに焼け火箸(水曜日掲載)